

隨泉寺寺報

2002 年 5 月号 第381号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

宗祖降誕会法座

講師 戸河内町 真教寺住職

法山 知己師

講題 「いのちの視点」

いよいよサッカーのワールドカップが始まります。4年に一度のスポーツの最高峰の大会です。ひょっとすると規模や予選参加数、テレビを通じての観戦者数などからすると、オリンピックより大きなスポーツの祭典かもしれません。私は野球も好きですが、サッカーも大好きです。6年前に日本開催が決まって以来、待ちに待っていた感があります。スポーツの面白さはルールがあるということでしょう。特に時間とか回数の制限があることです。何時までもやっているのでは決着はつきません。野球なら9回、サッカーなら90分です。その範囲の中でどれだけ頑張るかということです。8年前のアメリカ大会の予選でカタールのドーハというところでの予選の最終戦で、ほとんど予選突破が決まっていたのですが、ロスタイムという時間帯の最後の1分間に、1点取られて出場できませんでした。ドーハの悲劇というやつです。何十年という日本サッカー協会の悲願が最後の1分間でふいになってしまいました。ラモスというブラジルから帰化した選手は年齢からして最後の大会でしたから、大声をだした泣いていました。試合は次もありますが、時間は二度と返りません。しかし考えてみると私達もその最後の1分間の連続を生きているのです。

5月の行事予定

- 5月14日昼席午後1時より……降誕会法座
- 5月14日夜席午後8時より……出張法座 下平原 久保久男氏宅
- 5月15日朝席午前10時より……降誕会法座 初参式
- 5月15日昼席午後1時より……降誕会法座

お浄土のあなたへ

徳澤 美智子

あなたは自分の人生を掛けて、お浄土へ還られるまで、本当に家族想いの優しい夫でしたね。あまりのあなたの存在が大きかったので、私はここにきて、心の中を埋めるのにどうしたら良いのか戸惑っています。

平成13年4月2日朝、元気に職業安定所に行き、帰宅して部屋に入った直後、コタツの横で意識を失って倒れましたね。娘と一緒に死なせてなるものかという思いで、心臓マッサージ、救急車を呼んだりして病院へ運んでもらいました。

皆様のお蔭で命だけは取り止めましたが、願いも届かず、意識回復の無いまま、7月17日、力尽きてしまいましたね。

一生懸命、頑張ってくれたお蔭で、あなたの優しさ、すばらしさをご縁のあった方々に知らされ、益々尊敬いたしました。

何故元気だったあなたが、心不全で突然倒れたのかも、その後の心電図の結果などで判り、少し納得出来ました。

思い返せば1月10日の定年退職式典へ、夫婦揃って、元気で出席出来た事を本当に喜び合いましたね。あなたは45年間の会社生活に、自分自身に金メダルを贈りたい気持ちだとも言いました。

第二の人生、娘達家族と二世帯住宅で、孫の世話をしながらゆっくり、くつろいだ生活がすぐそこ迄来ていたのに、急いでお浄土の人となりましたね。私は夫婦揃って新築に入るのが夢だったので、寂しくてたまりませんよ。でも娘夫婦、孫が側に居る分、随分癒されていると思います。

今はただ、あるがままに（阿弥陀如来様におすがりして）今日一日を生きております。

あなたが築いてくれた心の財産をこれから私が孫達に伝えますからね。見守ってください。私はあなたと結婚して幸福な34年間でしたよ。あなた。

初参式のご案内。

5月15日降誕会の法座の朝席のあと平成十三年生まれの子供さんの初参式を行ないます。仏様のこどもとして、すくすく育ててください。近所におられたらお誘いして下さい。

おねがい。

降誕会のお供えをまだのところは五月の法座の時お願い致します。

ありがとうございます。

特別永代経	一金 十万円也	西川	元 様
特別永代経	一金 十万円也	門前	二夫 様
門信徒会	金一封	岩本	一二三様
門信徒会	金一封	西川	元 様

[5月の法語]

他力ということは 本当の事実に 目覚める力
本多 弘之(ほんだ ひろゆき)

1938年、中国黒龍江省孟家崗(旧弥栄村)生まれ
『親鸞の鉉脈 - 清沢満之』(草光舎)より

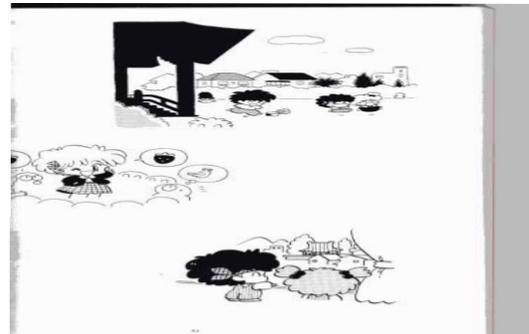
[法話]

昨年のある日、妻と娘は鎌倉(かまくら)に遊びに行きました。妻も娘も「大仏さん」の表情に何ともいえない悲しさを感じたようです。娘はその微笑を目(ま)のあたりにして、「大仏さんから“どんな悲しいことが起こっても引き受けなさい”と言われたような気がする」とつぶやいたと言います。そして「その自信は自分にはもうない」とも。娘はその時、妊娠(にんしん)五ヶ月の身でした。彼女はその一年数ヶ月前、お産を目前にしてお腹の赤ん坊の病気を宣告(せんこく)され、結果的には、死んだわが子を出産するというむごい経験をしていました。妻から娘のこの言葉を聞かされた私は、お産をひかえた娘の胸中(きょうちゅう)を思うとともに、私の彼女にとった言動(げんどう)を思い起こさざるをえませんでした。

娘の死産(しざん)(私にとっては孫の死)という事態(じたい)の中で、私は比較的(ひかくてき)早く孫の死の悲しみから気持ちをきりかえることができました。私は「縁がなかった」とか「老少不定(ろうしょうふじょう)」とかの言葉で、娘を慰(なぐさ)めようとしました。しかし彼女は、なかなかこれらの言葉にうなずきませんでした。私はその娘の姿を見て、彼女が仏の教えに遠いから子どもの死を受け入れられないのだと考えていたように思います。私は娘に直接口にこそ出せませんが、「仏の教えを聞いて、どんなに悲しいことが起こっても引き受けられるようになりなさい」と語りかけていたように思うのです。

しかし、もし今、私の妻が突然亡くなったとして、私はその死を受け入れることができるだろうか、ふと考えます。

私の娘が子どもの死を容易(ようい)に受け入れることができなかつたように、私もま



たその死を受け入れることはなかなかできないのではないだろうか。だとしたら、「仏の教えを聞いて死を受け入れることができるようになる」と私の思いは、その内容をもう一度吟味(ぎんみ)し直す必要がありそうです。

『歎抄(たんにしょう)』第九条(聖典629)は、親鸞聖人(しんらんしょうにん)と唯円(ゆいえん)との死の受容(じゅよう)をテーマとした問答(もんどう)と考えらる。唯円は、「念仏してもなぜ“いそぎ浄土(じょうど)へまいりたきところ”がないのか?」と問います。親鸞聖人は答えます。「親鸞もこの不審(ふしん)ありつるに」と。自他(じた)の死をなぜ受容できないのかという唯円の問いに自分も同じだと答える聖人。ここには仏の教えを聞き、念仏申す身になっていながら死を受け入れることのできない人間の姿が赤裸々(せきらら)に語られています。

私は今「自分を変える」とか「自分が変わる」ということについて、大きな思い違いをしていたのではないかと考えています。私たちは「自分の思いどおりに自分を変えたい」という欲求(よつきゅう)をもっています。

分が変わることによって苦しみから逃(のが)れられるように見えることが多々あからです。私たちはそのためにあらゆる努力を惜(お)しみません。また自分が変わるためには何でも利用しようとしています。仏の教えも念仏もその例外ではありません。

「死を受け入れることができたなら、どんなに楽になるだろう」、そう思ってどんなに努力しても、死を受け入れられない自分は変わらない。「教えを聞き、念仏申す身になればどんな悲しみも引き受けられる」はずだと考えて念仏しても自分は変わらない。

他力(たりき)とはそのような自分の事実を知らせるはたらき、またそのような自分をそのまま救うはたらき、そんなことを思っています。

島 潤二(しま じゅんじ)
福岡・仁業寺

